

日本ベネズエラ協会会報 第5号

日本ベネズエラ協会
会員各位

カラカス在住の小原京子様より当協会会員の皆様にカラカス便りが送付されてきましたので、送信いたします。

ご高覧の上、皆様のご意見、ご感想等をお寄せ頂ければ幸いです。
なお、配信停止を希望される場合はその旨お知らせ下さい。
また、本会報の転送はご遠慮下さい。

日本ベネズエラ協会
〒113-0033 東京都文京区本郷 2-32-2-903
TEL/FAX:03-3812-4530
e-mail:y_harada@mug.biglobe.ne.jp

カラカス、2009年7月10日
小原京子

日本ベネズエラ協会の皆様、こんにちは。
7月7日お昼、ピースボートが500人近い日本人乗客を乗せてラ・グアイラ港に入港しました。その日の夜は早速、バルガス州庁舎とその前の広場で歓迎のフェスティバルがありました。丁度満月の夜、しかも七夕。会場の周りに飾られた笹には、日本語、スペイン語で願い事が書かれた色とりどりの短冊が揺れました。バルガス州知事とラグアイラ市長の歓迎あいさつで開会し、ベネズエラ側からは、ユースオーケストラの演奏、子供のサーカス、太鼓の演奏などが披露され、アヤカ（とうもろこしの粉・肉・野菜をバナナの葉で包んだチマキみたいな食べ物）とフルーツジュースが振舞われました。ピースボートの乗客たちは、ベネズエラの女の子達に浴衣の着付けをしたり、折り紙を教えたり、習字で名前を書いてあげたり、ソーランやエイサーのパフォーマンスを披露したり、綿菓子をごちそうしたりと、盛りだくさんの楽しい催しが夜遅くまで続きました。

8日の朝は、チャベス大統領が午前9時半から11時の間にピースボートを訪問する、という連絡が大統領府から入り、波乱のスタートでした。「本当に？」と半信半疑だったものの、大多数の乗客はその日の予定を急遽変更し、船の代表者は紋付袴まで着て待っていたのに、直前30分前にドタキャンになり、一同大層がっかりしました。

ベネズエラ滞在中、乗客たちはそれぞれの興味に合わせいろんなツアーに参加しました。私は、8日は「エル・システマの魅力に迫る」ツアー、9日は「ベネズエラの学校訪問」ツアーに通訳として同行しました。8日のツアーは、「ベネズエラ青少年オーケストラシステム」（通称エル・システマ）の活動を視察するというものでした。1975年、元文部大臣、作曲家で経済学者でもあるホセ・アントニオ・アブレウ博士の提唱により、カラカスの街角のガレージで11人からスタートし、34年経った今、全国30万人が音楽を学ぶ一大オーケストラ教育・演奏システムです。そしてこのシステムで育った選りすぐりの演奏家たちで編成されるのが、「ベネズエラ・シモン・ボリバル青少年オーケストラ」です。100年に一度の指揮者ともいわれるグスタボ・ドゥダメルや、17歳でベルリンフィルのコントラバス奏者となったエディクソン・ルイスなどもエル・システマから育った音楽家です。この日はまず、バルガス州の子供達にバイオリンやトランペットなどの楽器35台が贈呈されました。これらは全て日本の楽器店、学校、かつて楽器を弾いていた方などから提供されたものです。楽器を手にした子供達の嬉しそうだったこと。会場となったエウヘニオ・マリア・オストス小学校では、マリア州知事夫人を始めたくさんの生徒、先生、保護者のみなさんが大歓迎してくれました。リキリキ（木綿の上着）で正装した子供達が牛迫いの踊りを披露し、お母さんたちが作ってくれたアレパ（とうもろこしパン）やエンパナーダ（肉や野菜などを包んだ揚げパイ）もとてもおいしかった。続いてカラカスのテレサ・カレーニョ劇場と、まだ正式オープン前の「音楽による社会活動センター」の見学。このセンターは「エル・システマ」の母体であるFESNOJIV（ベネズエラ青少年オーケストラシステム財団）の本部にもなっています。私達が訪問した時、テレサ・カレーニョ青少年オーケストラが翌日のコンサートのリハーサル中でした。特別に見学させてもらうことを許され、真新しいホールに入ると、キネティックアート（動くように見える美術作品）の巨匠カルロス・クルス・ディエス・デザインのカラフルな座席が目飛び込んできました。そして、ステージで指揮をしていたのは、あの！グスタボ・ドゥダメルではないですか！一同、本番さながらのコンサートと目の前のドゥダメルに夢見心地のひと時を過ごしました。そして、船に帰る前にはFESNOJIVのラグアイラ支部に寄って、オーケストラの演奏を聴き、合唱団が日本語で「ふるさと」と「浜辺の歌」を歌ってくれました。彼らが「発音どうだった？意味分かった？」と聞くので「パーフェクトに分かったよ。でもあなたたちは意味分かるの？」と返すと「ノォォー」と叫んでいました。途中でマリア州知事夫人がまたご一緒して下さり、素敵なスピーチでみんなを励ましてくれました。そして帰船後の午後8時。船内では有名な太鼓グループ「グルポ・マデラ」のワークショップがあり、アフリカのリズムを髣髴とさせる太鼓演奏に合わせて、歌って踊って夜が更けていきました。

3日目。私が同行したグループは、8万5千平米の広大な敷地に、保育園・幼稚園、小・中学校、高等学校、大学、専門学校、成人教室、聾唖学校など、全ての段階の教育施設が共存する「グラン・コロンビア」学園都市で一日過ごし、

政府が推進するボリバリアーナ教育の現場を見学しました。ミシオン・ロビンソン、ミシオン・リバス、ミシオン・スクレ、ミシオン・チェゲバラなどの教育政策のもと、今までおざなりになっていた貧困層にも教育の機会が平等に与えられるようになったという説明が校長先生からありました。夏休み直前ということもあって、子供達はすっかりリラックスモード。日本の文化紹介では、折り紙を一緒に折ったり、名前やメッセージなどを習字で書いてとせがむたくさんの子供達や先生に囲まれてにぎやかな交流ができました。

出港前の午後8時半から、グアイラのユースオーケストラの船内コンサートの後、午後11時、ピースボートは、オーケストラの団員22人をそのまま船に乗せて、次の寄港地パナマに向け、出港していきました。お互いの国のことをほとんど知らない日本とベネズエラ。今頃は船内では興味津々で交流が続いているでしょう。¡Buen Viaje!